



6月初めの土日、今年も「今町・中之島大凧合戦」を見に出掛けた。

長岡市中之島地区と対岸の見附市今町地区との間で行われる行事で、縦 4.3 メートル、横 3.2 メートルの巨大な「六角凧」が空を舞う。

アニメやキャラクターものも増えたが、伝統の武者絵は見る者を圧倒する美しさだ。

刈谷田川の土手沿い、普段は地域の方が散歩かランニングをしているくらいで人通りはほとんどない。

私自身、ここに来るのはこの時期くらいか。老若男女で溢れるのを眺めるのは気分が良い。

今年の合戦は風に恵まれた。

「合戦」というのは、言ってしまうえば草相撲のようなもので、空中で凧糸が絡んだところで川の両岸から一気に引き合う。

風がなく凧が飛ばない時には、敵（かたき）同士が両岸から凧糸を持ち寄って絡ませ、どちらかが切れるまで綱引きさながらに引き合う。

これを「地絡め（じがらめ）」という。

法被姿の男達の威勢のいい掛け声、凧が破れて骨組が折れる音、危険を知らせる実況の怒号が土手に響くと、鳥肌が立つような迫力。

毎年欠かさず足を運んでいる。

法被姿の男達にも悩みがある。

後継者不足だ。

例外はあるものの、夙組のほとんどは高齢化と若手の確保に頭を悩ませている。
昔ながらの組ほどその傾向は顕著だという。

過日、ある建築家から聞いた話が頭をよぎる。

ある地域のまちづくりについての話だ。

数十年前に新興住宅地として分譲されたその土地は、現在、困難に直面している。

困難とは高齢化だ。建築家曰くそのまちに軒を連ねる家のほとんどが“傷んでいる”とのこと。
新築した家も時間が経てば綻びが生じるが、修繕は進んでいない。

一時はそれぞれの家庭で新しい命が生まれ、まちは賑わいに溢れた。

しかし、その場所を巣立つ人も少なくなかった。

若い世代で形成された住宅地は時代の経過と住民と共にそのまま年を取り、活力を弱めつつある。

今こそ地域で一丸となって助け合っていかなければならないが、悪い意味で昔ながらのしがらみを払しょくしてしまった地域でもある。

いわゆる「しがらみ」を嫌煙する感情は誰しもが持ちうるものだ。

世代によって考え方も違えば、付き合うのが面倒になるような風習もあるだろう。

ただ、それをあまりにも遠ざけてしまうことに、建築家のその人は、警鐘を鳴らす。

夙（いか）の戦場（いくさば）は、刈谷田川の土手の上。

どこから向かうにしても、まち場から坂道を上らねばならない。

孫に手を引かれて歩く老夫婦の後ろを、その子の両親だろうか、若い二人が綿あめの袋やら金魚の入った袋を持ってゆっくりと歩いていくの見た。

「おばあちゃん、夙がいっぱい！」

賑やかで和やかなやり取りが周囲を包んでいた。

中之島地区と今町地区をつなぐ猫興野橋（ねこごうやばし）の中ほどで、旧友に出くわした。

私と同じ様に進学で地元を離れ、職場も東京に求めた彼である。

なんでも、この春に転職を決めて地元に戻ってきたという。

しばし思い出話で盛り上がった。

彼の横で大きいお腹の奥さんが微笑んでいた。

実家には入らずに、いずれ二人の新居を造るべく、今は仮住まいの日々を楽しく過ごしているという。

梅雨前の空が抜けるほど青かった。